

2024年3月期第2四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2024年3月期第2四半期決算説明資料

[https://www.mitsui-](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=TeeL8XauqXY%3d&tabid=159&mid=1060&TabModule1202=0)

[kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=TeeL8XauqXY%3d&tabid=159&mid=1060&TabModule1202=0](https://www.mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=TeeL8XauqXY%3d&tabid=159&mid=1060&TabModule1202=0)

(補足) PKG : パッケージ基板

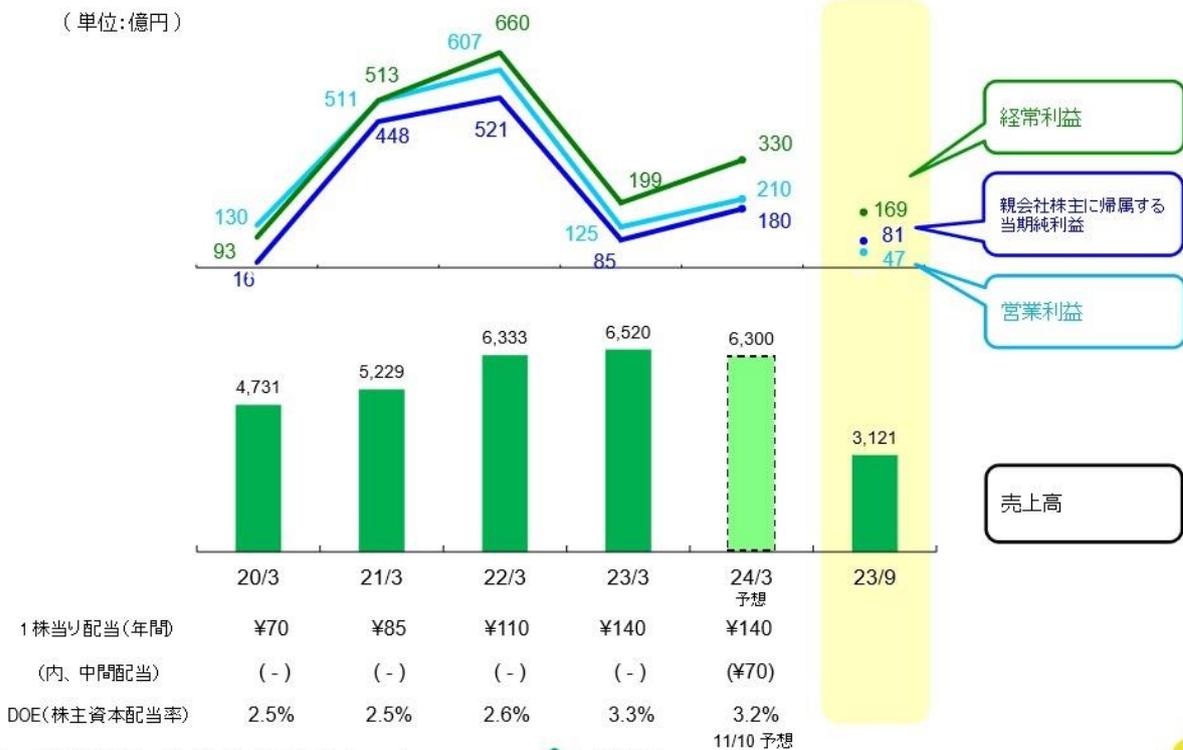
HDI : マザーボード (High Density Interconnect)

■ご説明



売上高・利益

(単位:億円)



Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Rights Reserved.

決算説明資料、2ページをご覧ください。

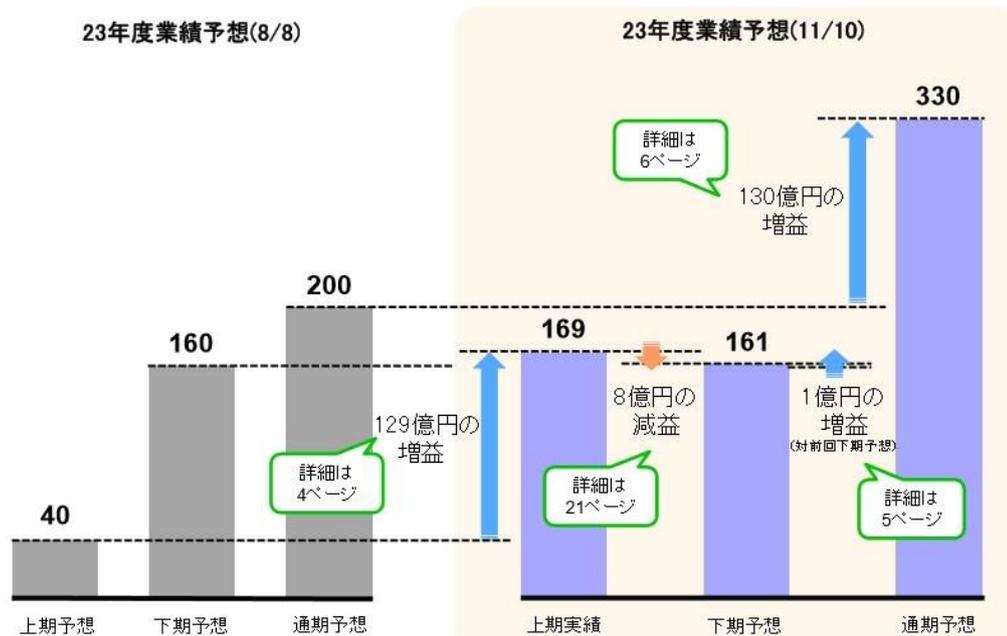
・第2四半期累計の売上高は3,121億円、営業利益は47億円、経常利益は169億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は81億円となりました。2024年3月期の連結業績予想は、売上高6,300億円、営業利益210億円、経常利益330億円、当期純利益180億円と見込んでおります。

・配当につきましては、従来予想通り、中間配当1株当たり70円、期末配当同じく70円、年間で140円を見込んでおります。

23年度経常利益見込

23年度経常利益は330億円と前回業績予想比で130億円の増益を見込む

(単位:億円)



Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Rights Reserved.

三井金属

3

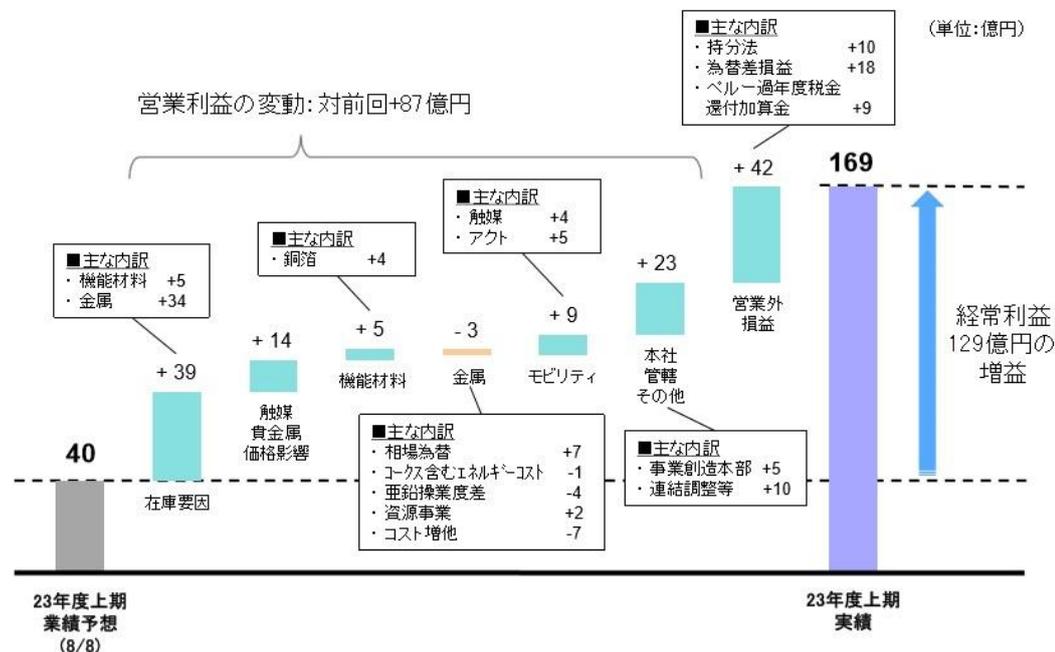
それでは、3ページの23年度経常利益見込をご覧ください。

・第2四半期累計期間の経常利益は、8月8日に開示しました40億円から129億円増益の169億円となりました。一方、下期の予想につきましては、従来予想より1億円増益の161億円を見込んでいます。通期の予想につきましては、8月8日に開示した200億円から130億円増益の330億円を見込んでいます。

・それぞれの要因につきまして、次のページ以降で説明いたします。

23年度上期経常利益(対前回業績予想)

23年度上期経常利益は169億円と前回業績予想比で129億円の増益



まず、上期業績の上振れ要因についてご説明いたします。4ページをご覧ください。

・好転のうち、最も影響の大きかったのが、為替が円安に動いたことによる影響です。グラフの左から二つ目の在庫要因や、右から二つ目の営業外損益、また、特に金属セグメントの好転要因等に含まれる影響を合わせると、約60億円の好転要因となっております。また、触媒事業における貴金属価格の影響が14億円の好転要因となりました。

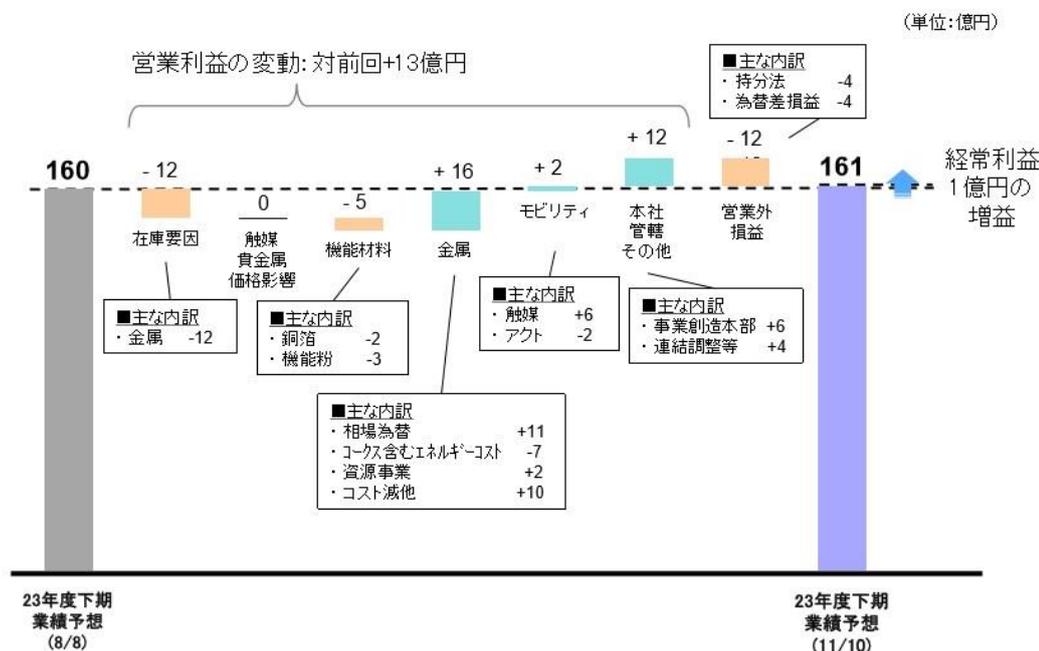
・各事業においては、機能材料セグメントで、MicroThin™の各種用途向け販売量が想定を上回ったこと、電解銅箔も堅調に推移したことから、銅箔事業で4億円の増益となり、セグメント全体でも5億円の増益となりました。

・モビリティセグメントにおいても、触媒の販売量が二輪、四輪とも想定を若干上回ったことや、三井金属アクト株式会社において、北米および日本の売上が増加したことから、セグメント全体で9億円の増益となりました。

・また、ペルーにおいて、20年ほど前に税務否認された案件で不服申し立てをしたところ、当社の主張が認められ、納付していた税金が還付され、その金利相当分約9億円を営業外利益に計上したことなどもあり、対前回予想比で129億円と大きく増益となりました。

23年度下期経常利益見込(対前回業績予想)

23年度下期経常利益は161億円と前回業績予想比で1億円の増益を見込む



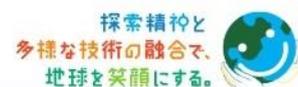
次に、下期業績予想の変化点についてご説明いたします。5ページをご覧ください。

・ほぼ従来予想通りの161億円を見込んでおります。

・機能材料セグメントにおいては、PKG向けMicroThin™は回復傾向にあるものの、回復の度合いは前回想定したほどではないと予想されることから、販売量を前回比で約5%引き下げたこと、また年明けから回復を見込んでいた電解銅箔も、想定ほどの回復が見込めず、販売量を12%ほど引き下げたことによる減益を見込むものの、電解銅箔のミックス改善による好転もあり、銅箔事業としては2億円の減益を予想しております。

・その他、金属セグメントが、円安の影響などで16億円の増益を見込んでいることや、事業創造本部の費用が想定を下回る見込みであることなどの好転要因と、在庫要因や営業外損益の影響による悪化要因が打ち消し合う形で、前回予想比1億円の増益を見込んでいます。

損益計算書



(単位: 億円)	上期			下期			通期		
	2023 実績	2022 実績	増減 (23-22)	2023 今回予想	2022 実績	増減 (23-22)	2023 今回予想	2022 実績	増減 (23-22)
売上高	3,121	3,424	-303 -8.8%	3,179	3,096	83 2.7%	6,300	6,520	-220 -3.4%
売上原価	2,739	2,865	-126 -4.4%	-	-	-	-	-	-
売上総利益	382	559	-177 -31.6%	-	-	-	-	-	-
販売費・管理費	336	326	10 3.0%	-	-	-	-	-	-
営業利益	47	233	-186 -80.0%	163	-108	271	210	125	85 67.6%
営業外収支	122	107	15	-2	-34	31	120	74	46
経常利益	169	340	-171 -50.4%	161	-141	302	330	199	131 65.9%
特別損益	-55	-6	-49	-15	-41	26	-70	-47	-23
税引前利益	114	334	-220 -65.9%	146	-182	328	260	152	108 71.3%
税金費用・非支配株主帰属損益	32	55	-22	48	12	36	80	67	13
親会社株主に帰属する 当期純利益	81	279	-198 -70.8%	99	-194	293	180	85	95 111.5%

第2四半期累計期間の実績と、通期の見通し等についてご説明いたします。7ページの損益計算書をご覧ください。

・第2四半期累計期間は、前年同期に対し、円安が進んだものの、亜鉛価格が下落した影響が大きく、売上高は303億円減少し、3,121億円となりました。一方、機能材料セグメントの販売量減少に加え、エネルギーコスト上昇の影響などから、営業利益は186億円減益の47億円、経常利益は171億円の減益で169億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は198億円悪化の81億円となりました。

・通期見通しについては、第3四半期以降の相場を、亜鉛2,400ドルトン、為替1ドル145円で見、経常損益330億円を見込んでおります。

セグメントの業績(1) 機能材料

(単位: 億円)

	上2023 実績	上2022 実績	増減 (23-22)	下2023 今回予想	下2022 実績	増減 (23-22)	FY2023 今回予想	FY2022 実績	増減 (23-22)
■売上高	597	657	-60	653	468	184	1,250	1,125	125
■営業利益	65	109	-44	80	-10	90	145	99	46
■経常利益	74	124	-50	76	-17	93	150	107	43
※実力損益	65	118	-53	76	-8	84	141	110	31

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

(機能材料製品)	(主な用途)
機能性粉体 (電池材料)	 <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリッド車向けニッケル水素電池 ・電気自動車向けリチウムイオン電池
機能性粉体 (機能粉)	 <ul style="list-style-type: none"> ・各種電子部品 ・ガラス研磨材
銅箔	 <ul style="list-style-type: none"> ・高密度半導体パッケージ材料 ・プリント配線基板
薄膜材料	 <ul style="list-style-type: none"> ・フラットパネルディスプレイ

経常利益の増減説明

[上2022 → 上2023 - 50]

銅箔 -35 (電解銅箔・MicroThin™減販 他)
機能粉 -5 (主要製品減販 他)
電池材料 -3 (減販 他)

[FY2022 → FY2023予想 + 43]

銅箔 +43 (電解銅箔・MicroThin™増販 他)

続きまして、セグメントごとの状況についてご説明いたします。最初に、機能材料セグメントです。資料の13ページをご覧ください。

・上期の経常利益は、前年同期比で50億円減益の74億円となりました。銅箔事業における販売数量が、第2四半期同士で見れば、MicroThin™で前年並み、電解銅箔は約2割の増加となったものの、第1四半期同士では、前年度が非常に好調だったこともあり、MicroThin™、電解銅箔ともに減販となった影響が大きく、銅箔事業で35億円の減益。また機能性粉体において、銅粉の販売量は前年並みであったものの、研磨材はじめ、その他の製品が減販になったことなどにより、5億円の減益。電池材料でも減販の影響などにより、3億円の減益となったことなどがセグメントの減益の主な要因でございます。

・通期の予想については、前年同期比で43億円増益の150億円と見込んでいます。特に、前年度下期に非常に厳しかった銅箔の販売数量の回復が見込まれることが、その主な要因であります。

セグメントの業績(2) 金属

(単位: 億円)

	上2023 実績	上2022 実績	増減 (23-22)	下2023 今回予想	下2022 実績	増減 (23-22)	FY2023 今回予想	FY2022 実績	増減 (23-22)
■売上高	1,147	1,348	-202	1,303	1,216	88	2,450	2,564	-114
■営業利益	-19	93	-112	64	-52	116	45	41	4
■経常利益	73	133	-60	67	-43	109	140	91	49
※実力損益	96	123	-27	79	5	74	175	128	47

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

経常利益増減分析

	上2022→ 上2023	FY2022→ FY2023予想
相場・為替	-17	-20
T/C条件(亜鉛)	11	16
たな卸資産在庫要因	-33	2
持分法損益	-13	-23
エネルギーコスト	-29	-11
(上記のうち、コークス)	(14)	(15)
受取配当金	60	60
その他※	-39	25
合計	-60	49

2023年度年間損益感応度(経常損益)

(単位: 億円)

		フォローオン	予約含む
亜鉛(LME)	±100\$/t	14.4	13.4
鉛(LME)	±100\$/t	6.6	6.6
為替	±1yen/\$	6.7	6.0

亜鉛TC条件

FY2022	230 \$/t	
FY2023	274 \$/t	・ 3,000\$/t以上で+6%

※その他の主な内訳

上2022→ 上2023	亜鉛製錬操業度差 -18、亜鉛・鉛固定費(大定修-15含む) -21、資源事業+2、PGMリサイクル -5
FY2022→ FY2023予想	亜鉛・鉛固定費(大定修-15含む) -27、鉛原料代差 -7、銅製錬操業好転 +33、銅製錬大定修 +25、資源事業+2、PGMリサイクル +4

続きまして、金属事業セグメントです。14ページをご覧ください。

・上期の経常利益は、前年同期比で60億円減益の73億円となりました。日韓共同製錬の一時的な配当金66億円などのプラス要因はあったものの、亜鉛相場下落の影響により、在庫要因で33億円のマイナスとなったことや、同様に、相場・為替による影響として記載しておりますが、マイナス17のうち、相場だけ取ると42億円の減益要因となったこと、またコークスを含むエネルギーコストの悪化で29億円のマイナスとなったこと、八戸製錬が今年度大規模定期修繕だったことなどから減益となりました。

・通期の予想に関しては、前年同期比で49億円の増益を見込んでおります。こちら、亜鉛相場下落により73億円の減益要因となると見ておりますが、円安によるプラスサイド53億円により、相場・為替合わせて20億円の減益。プラスサイドでは、今年度は銅製錬の大規模定期修繕がない年であることや、上期同様、日韓共同製錬の配当金の影響などがございまして、セグメントとしては増益を見込んでおります。



セグメントの業績(3) モビリティ

(単位: 億円)

	上2023 実績	上2022 実績	増減 (23-22)	下2023 今回予想	下2022 実績	増減 (23-22)	FY2023 今回予想	FY2022 実績	増減 (23-22)
■売上高	1,127	1,092	35	923	1,073	-150	2,050	2,165	-115
(内、三井金属アクト)	(484)	(418)	(66)	(506)	(442)	(64)	(990)	(860)	(130)
■営業利益	28	38	-10	52	-4	56	80	34	46
(内、三井金属アクト)	(4)	(-11)	(15)	(11)	(-2)	(13)	(14)	(-14)	(28)
■経常利益	38	75	-37	42	-43	85	80	32	48
(内、三井金属アクト)	(6)	(-4)	(10)	(9)	(-2)	(11)	(15)	(-6)	(21)
※実力損益	84	67	17	42	-4	46	126	63	63

※実力損益：経常利益から触媒貴金属価格影響を除いたもの

経常利益の増減説明

(モビリティ事業本部)	(主な製品)
触媒	・二輪車・四輪車 排ガス浄化用触媒
三井金属アクト	・自動車用ドアロック
三井金属 ダイカスト	・ダイカスト製品

[上2022→上2023 - 37]

触媒 -52(貴金属価格影響、
営業外為替差 他)
アクト +10(コスト改善 他)
ダイカスト +6(歩留改善 他)

[FY2022→FY2023予想 + 48]

触媒 +23(増販、貴金属価格影響、
営業外為替差 他)
アクト +21(増販、コスト改善 他)
ダイカスト +10(増販、歩留改善 他)

アクト増減分析

	上2022→ 上2023	FY2022→ FY2023予想
増減販	4	16
コスト削減	8	5
その他※	-2	-
合計	10	21

※その他の主な内訳

鋼材等材料価格上昇
為替差
退職給付債務
輸送費好転
補助金収入

	上2022→ 上2023	FY2022→ FY2023予想
	0	-2
	-1	-1
	-1	-4
	4	5
	-2	0

続きまして、モビリティセグメントです。15ページをご覧ください。

・上期は、前年比37億円減益の38億円となりました。プラスサイドとしては、三井金属アクト社におけるコスト削減、および北米と日本の売上高が伸びた影響で10億円の増益。ダイカスト事業における歩留改善などの影響でプラスの6億円となったことなどがございしますが、マイナスサイドとして、触媒の貴金属価格影響で54億円と大きく減益となっており、セグメントトータルとしては減益となりました。

・通期の予想に関しては、前年同期比で48億円の増益を見込んでおります。触媒の増販影響や、営業外為替差によるプラスと、貴金属価格影響のマイナスなどで、触媒事業で23億円の増益。三井金属アクトおよびダイカストで、増販やコストダウン等の影響によって増益となり、セグメント全体で増益となる見込みでございします。

財政状態

(単位: 億円)



*Net 有利子負債/自己資本

Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Rights Reserved.

財政状態について、簡単にご説明いたします。資料の17ページをご覧ください。

・下期の予想を織り込んだ年度末の連結自己資本比率は41.4%、ネットD/Eレシオは0.68となる見込みでございます。当初の計画より好転する見込みです。

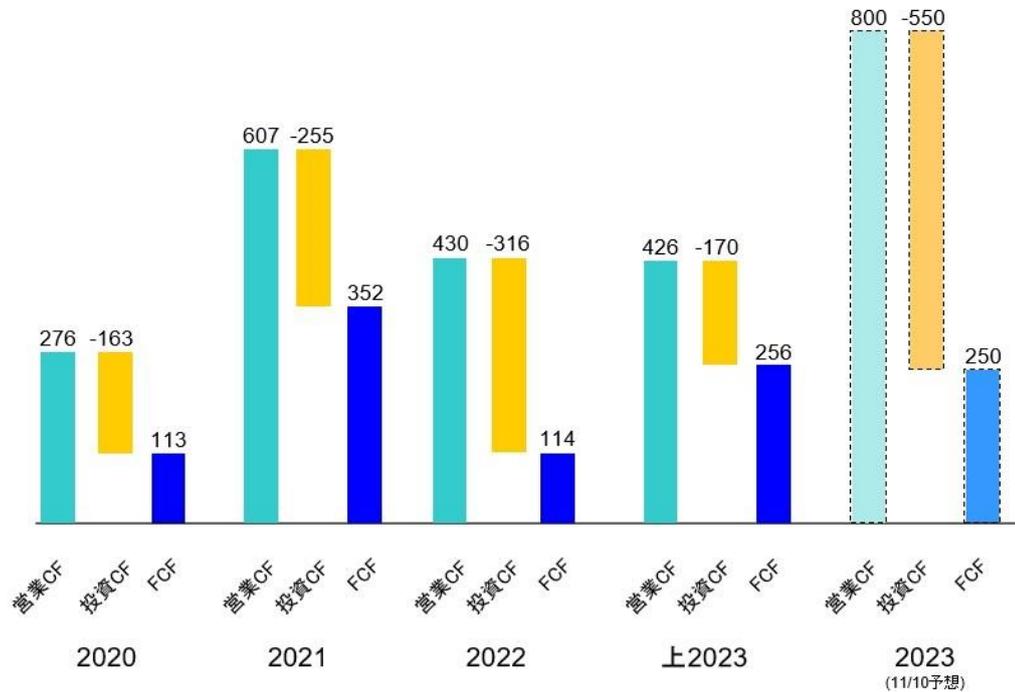


キャッシュフロー

探索精神と
多様な技術の融合で、
地球を笑顔にする。



(単位: 億円)



Copyright © Mitsui Mining & Smelting Co., Ltd. All Rights Reserved.



18

キャッシュフローにつきましては、資料の18ページをご覧ください。

・今年度、営業キャッシュフローの改善により、当初の計画を250億円上回る250億円のフリーキャッシュフローを見込んでおります。

■質疑応答

【機能材料セグメント】

Q. 銅箔について、MicroThin™が上期に計画よりも少し上振れた背景と、下期に前回計画よりも少し減額をされている理由を教えてください。また、HDI向けの新規採用の状況に何か変化があるかも解説をお願いしたい。

A. 上期が前回比で増えている背景は、PKG向けに関しては、前回決算時は1Q実績でお客様からの在庫需要分が多く入っていて2Qでその反動が来るため減ると見ており、その通り2Qで減ったが減少の度合いが実需の強さから抑えられたため、対前回比で増加した。下期については、PKG向けは前回決算時は年明けの1-3月からの本格的な回復を見込んでいたが、今回は年明けでの本格的な回復には至らないと見ており、足元の状況、お客様の話等々から判断して、計画を少し引き下げた。そのため、上期から下期にかけて回復していく流れは前回同様だが、その水準が前回より若干下回る。

HDI向けの新規採用の動きは、現状中華系のスマホメーカー3社に採用されている状況に変化はない。その内の1社で採用機種種の拡大を目指している動きは見られるが、短期的にはあまり大きな影響はないと見ている。

Q. 電解銅箔が上期に計画よりも少し上振れた背景と、下期に前回計画よりも少し減額をされている理由を教えてください。

A. 上期が前回比で増えている背景は、当社では基本的にスマホ用途となるフレキ向けの電解銅箔

については、韓国系のスマホが想定より堅調に推移したことや、スポットの受注などが多かったことが要因である。もう一つの通信インフラ向けの銅箔では、AIサーバー向けの製品も含めて、こちらも前回比で増えている。

下期については、MicroThin™同様に電解銅箔も回復時期を遅らせて見ており、前回比で減少となっている。また、通信インフラ向けの中でもいわゆるハイエンドのVSP箔という、これはAIサーバー向けにも使われている製品で、こちらは増加しているが、ローエンド、ミドルレンジ向けのサーバー・データセンター用途の回復が想定よりかなり下回ると見ている。回復の水準が低く、前回下期と比較するとかなり低い数字になっている。

Q. MicroThin™、電解銅箔について回復の鈍化を織り込んだという話だが、お客様との話の中で、事業環境にどういった変化が起きて回復するペースが遅くなっているのか、それが回復するのはいつになりそうなのか、解説をお願いしたい。

A. スマホで言うと中華系の回復状況や、スマホ以外の用途でもメモリの回復状況といったところが、前回で見ていたような本格的な回復までは少し至らないだろうと判断した。いつ回復するのかというのはまさに現在精査しているところになり、おそらく来年度からの回復と考えているが、まだはっきりとお答えできない。

Q. 銅箔について、前回1Q決算では、前の1-3月期の非常に数量が低調だった時期の固定費の影響や4月からの値上げなどのマージン関連の説明があったが、今回の業績予想ではマージン関連の見方にどのような変化があるか解説いただきたい。

A. マージンについて、前回1Q決算のときには高簿価品が払い出されたことによる影響が出ていた。2Qに関しても、若干高簿価品が残っており、利益率は1Qより改善しているものの、2Qではまだ通常の水準まで戻っていない。値上げについても、MicroThin™や一部電解銅箔で実施しているが、エネルギーコストの上昇分をカバーするには至っていない。そのため、マージンは従来からやや低い水準にある。

Q. 銅箔について、資料13ページの機能材料セグメントの右下の記載の対前年度比較の23年度予想のところ銅箔はプラスの43億と記載されており、前回1Q決算の資料との比較では10億円ほど増えている。MicroThin™と電解銅箔の販売数量の計画を少し落としている中で、この10億円の増益要因について解説をお願いしたい。

A. 対前回予想との比較では為替の影響が大きく効いている。営業利益内のマージンに与える為替の影響と、あとは電解銅箔でAIサーバー向けのVSP箔という製品の販売が増加したことによるミックスの影響でマージンが改善されている。増益要因は主にはこの二つになる。

Q. VSP箔の数量はどのように見ているか、上期の対前年度比較と、今回通期予想の対前年度比較で教えていただきたい。

A. AIサーバー向けだけでなく、VSP箔という品種全体で言うと、上期の対前年度比較では10%ぐらい増えている。今回通期予想で見ると、30%から35%弱ぐらい増えている。

【モビリティセグメント】

Q. アクトが実力ベースで少し改善しているように見える背景を教えてください。

A. アクトが改善している要因の一つとして売上が順調に増えていることがあり、半導体不足等の影響が緩和されて自動車部品の販売増加による増益効果が出ている。もう一つは、アクトで日本や中国拠点対象の構造改革を行っており、コストダウン効果が徐々に出てきていることが挙げられる。

Q. 今後自動車生産が緩やかに回復するシナリオのもとで、これまで取り組んできた改善効果から今後の利益の見通しを教えてください。

A. 現在アクトでは電動スライドドア向けの製品の拡販に取り組んでいる。こちらについては既に採用実績があり、拡販はモデルチェンジのタイミングが影響するため時間軸としては少し先になるが、採用車種等が増えてきていて今後しっかり拡販していく。そのための体制作りの一環として、日本や中国での構造改革を行っており、来年度以降、ドアロックについても増収増益を期待している。

Q. 米国のダイカスト子会社の処理については、今後のフローの損益に影響するか。

A. 今回特別損失を計上したもので、完全に一過性である。

【事業創造本部】

Q. 資料4ページで、事業創造本部でプラス5億円と好転している背景は何か。例えば固体電解質やHRDP®のサンプル出荷が増えていることによる好転か、それともコスト計上で変化があつての好転か、教えていただきたい。

A. 事業創造本部の好転は、1億円程度サンプル収入の増加はあるが、基本的には費用が想定ほどかからなかったことによる。下期についてもほぼ同様に費用の発生を少なく見込んでいることが要因である。

【全体】

Q. 資料6ページから、主力事業である3セグメントの増益は24億で、それ以外は全部一過性的のように見える。次に資料13ページから15ページを見ていくと、実力損益は前回決算資料と比べると、3セグメント合計で54億好転している。実力損益は経常利益から在庫要因と触媒貴金属価格影響を除いたものと理解しており、そのことも含めて、違った数字になることを解説いただきたい。

A. セグメントごとの実力損益は、営業外の為替差益や受取配当金などの大きな項目も含まれている。資料4ページから6ページのグラフでは、右から2番目のところに営業外損益を全部纏めて記載しており、3セグメントの増減は営業利益から在庫要因等を除いたものになっている。そのため、その差額は営業外損益が含まれているかどうかである。

Q. 資料4ページから6ページで、「本社管轄その他」の好転が大きく、記載されている主な内訳に補足があれば教えていただきたい。

A. 資料4ページでは、主な内訳に記載しているもの以外の要因では三井金属エンジニアリングのプラスが4億円ほどがあり、その他に大きいものは特にない。また資料6ページでは、本社費関係のプラスが幾らか入っている。

以上